

「こんな してきます。」

わだいのしじんと

都会から田舎へ

「普通」とはどんな状態かは、価値感が多様化している現在では定義しにくいですが、一般的に、という意味でここでは使います。

1990年頃から、都会から田舎に移住する「田舎暮らし」を志向する人々が目立つようになり、健康や環境を重視するライフスタイルである「ロハス」という言葉も出てきました。地球環境問題や地域の農林業の不振、過疎・高齢化が深刻になってきた社会背景とも重なります。そして、日本の高度経済成長を支えた団塊世代やロハスな生活に志向性の高い人々を中心に、田舎への移住が見られるようになったのです。その間、地域

再生の有力な方法として、都市から田舎への人の流れである「田舎暮らし」は政策のバックアップを受けて推進されていきます。

しかし、お金持ちが田舎で優雅な別荘暮らしをするのではなく、エコロジカルな生活を自らの手で実践していくという「田舎暮らし」に飛び込むのは、やはり普通の暮らしではなく、変わった人がすること、できること、というイメージがあったのも事実です。独特な人だけがでる田舎暮らしは、いくら行政が勧めても限界があるでしょう。現実はどうなのでしょうか。

生活の場

日高川町中津地区は、和歌山県の中央部に位置する中、山

田舎暮らしと普通の暮らし

間地ですが、村の活性化のために全国に先駆けて村への移住を進めてきました。都会の人に農業や田舎暮らしを体験してもらう、移住者には住宅や田や生活上の必要な部分をサポートする、こうした積極的な政策でこの1年でも24人(2011年)が移住、約2000人の地区に旧中津村当時から移住者は約200人にもなっています。



学生の農業体験(日高川町にて)

県就農支援センターで農業研修を受けながら、一反三畝(13竹)の畑を借り50品目の少量多品種栽培に取り組んでいます。今後は農地を広げ、果樹栽培や農家民泊もしようと計画していますが、今の段階では食べていけないため、ミカンの季節労働や山仕事で収入を得る日々です。

一方、村のパン屋さんとして親しまれる安太さん(50歳夫婦は、18年前、子どもさんのアトピーが原因で空気の良いこの地に移住しました。長く大阪府まで車通勤をしていましたが、8年前に本格的にパン屋として開業。道の駅での販売や注文販売などで得意先を獲得、今後はもっと店を充実し地元の人々が働ける場にしたい、との希望を持っています。

田舎暮らしは、パンフレットにありがちな心の満足だけでは食べていきません。特に若い世代にとっては、自分で自分の食い扶持を「開拓していく」必要があるのです。経済的な不安は大きな障壁



神内さん一家

ですが、それでも移住が注目されてから30年近くを経て、「できる人」だけが実践できた田舎暮らしではなく、普通の生活の場として田舎が選ばれるようになってきたと思います。家を建て畑を作りパンを焼き、普通の暮らしができる田舎の意味はとも大い。普通の暮らしができなくなったから多くの農村は衰退しました。田舎で普通の暮らしを打ち立てようとしている人の登場に、農村再生の糸口があるといえます。

神内さんのお嬢ちゃんは今中津で生まれた和歌山ネイティブです。彼女が成人する20年後、この地が「普通の生活ができる田舎」のモデルになっていたら、地域再生はうまくいった、といえるのではないでしょうか。

プロフィール



湯崎 真梨子(ゆさき・まりこ)
和歌山大学地域創造支援機構 特任教授、地域創造支援マネージャー
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。